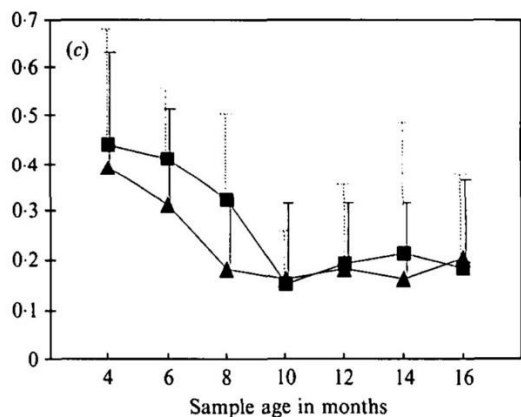
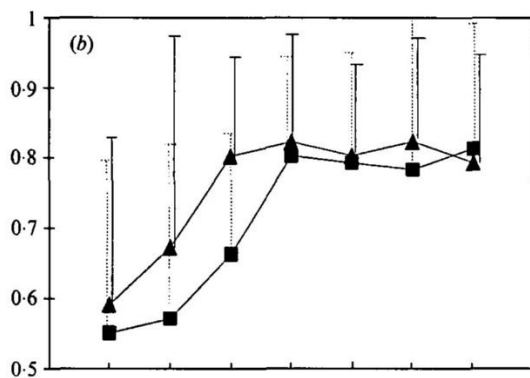
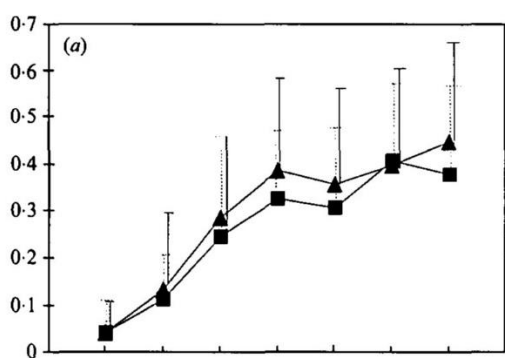


期待 82-喃語と ASD:

Oller et al. (1994) J. Child Lang., 21:33-58.

この論文の主なテーマは早産と社会経済的状態 SES が喃語に与える影響であるが、喃語ができる前の時期の音声についても記述があったので、とり上げた。主要なテーマについては図で簡単に説明する。

下の左の図は早産、右の図は SES が音声の発達に与える影響を示す。左図(a)は標準的な喃語の率 (syllable 数に対する喃語の割合)、(b)は声道の共鳴が十分な母音の音声、(c)は共鳴が不十分な母音の音声の率で、■が早産、▲が満期産のデータである。早産については暦年齢 chronological age だと喃語に差がみられたが、この図は gestational age で差はなくなった。しかし、喃語が出る前、出始める頃の母音的音声には差があり、早産児は共鳴が十分な音声の率が低く、十分でない音声の率が高い。右図は SES の影響で、■が低 SES, ▲が中 SES の結果である。(a)が喃語の率、(b)が1分当たりの発声数である。喃語には差はないが、SES が低いと発声数が少ない。母音的音声は共鳴が不十分なものから十分なものへと発達するので、ASD ではどう



った。しかし、喃語が出る前、出始める頃の母音的音声には差があり、早産児は共鳴が十分な音声の率が低く、十分でない音声の率が高い。右図は SES の影響で、■が低 SES, ▲が中 SES の結果である。(a)が喃語の率、(b)が1分当たりの発声数である。喃語には差はないが、SES が低いと発声数が少ない。母音的音声は共鳴が不十分なものから十分なものへと発達するので、ASD ではどう

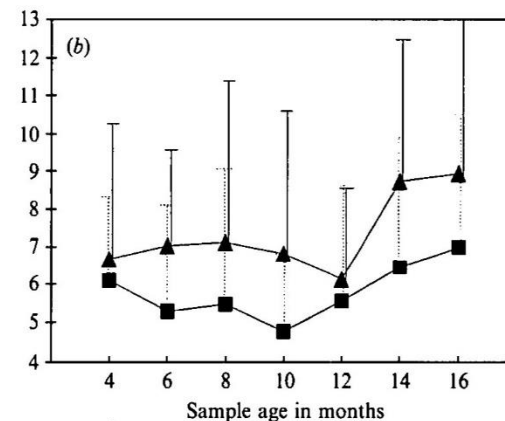
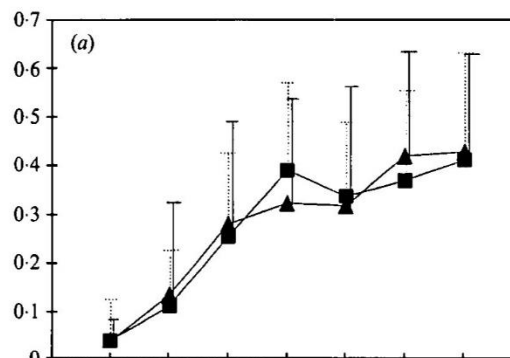


TABLE 5. *Descriptive statistics for five precanonical vocal types in infants aged 0;4-1;6 (chronological age sample)*

	Average ratio <sup>a</sup>		Percent samples having ratio = 0		Highest ratio for any sample	
	Full term	Preterm	Full term	Preterm	Full term	Preterm
Glottal fricative sequences	0.19	0.15	2	3	0.65	0.59
Glottal stop sequences	0.07	0.09	25	17	0.46	0.62
Squeals	0.03	0.03	49	45	0.40	0.34
Growls	0.03	0.01	50	69	0.44	0.26
Raspberries	< 0.01	< 0.01	72	75	0.22	0.18

<sup>a</sup> Number of syllables of the indicated type divided by the total number of syllables in the sample.

なっているのか興味深い。

上の表は声門摩擦音、声門閉鎖音、高い金切り声 Squeal, 低い唸り声 Growl, 舌を突き出して出すブーブー音 Raspberry の出現状況を早産と満期産で比較した。特徴的なのは、平均 ratio が低いこと（表の左）、出現がない sample が多いこと（表の中央）、ある sample では非常に高い率（表の右）を示すことである。つまり、幼児はある時に反復的にある音声ばかりだし、その後他の音声に移ってしまう。したがって、出現に規則性がなく、不安定で研究の対象にするには難しい面があるようだ。ただ、ASD が示す反復的な行動は、この最後の点に関係しないだろうか。

この論文には、音声の分類の訓練についての記述があり、参考になるだろう。また、もしソフトウェアによる自動的な分析が可能なら、それは好ましい。一部、squeal や growl は LENA で分析できるようだ。Canonical babbling/marginal babbling, そしてとくに fully resonant vowel /quasi-vowel の区別が自動的にできるなら、研究が捗るだろう。